

木-講演 31-1 国内多施設共同研究による落屑症候群における白内障手術の検討 (第1報：患者背景)**A Multicenter Study on Cataract Surgery for PE (1st Report Patient Demographics)**

かみやかずたか
○神谷和孝¹⁾、郷右近博康²⁾、森 洋齊³⁾、宮田和典³⁾、柴 琢也⁴⁾、
小島隆司⁵⁾

¹⁾北里大・医療衛生、²⁾北里大、³⁾宮田眼科、⁴⁾六本木柴眼科、⁵⁾慶応大

【目的】落屑症候群(PE)は、散瞳不良やチン小帯漸弱を伴い、白内障手術における難易度は高まるが、手術前における患者背景の全体像については不明な点が多い。今回はまず、国内多施設共同研究によるPEに対する白内障手術の術前因子について検討した。

【対象と方法】国内4施設(北里大学、宮田眼科、岐阜日赤、六本木柴眼科)において通常白内障手術を施行予定の40例49眼を対象とした。年齢、性別、瞳孔径、水晶体動揺の有無、眼圧、緑内障の有無、角膜内皮細胞密度、前房内フレアを後方視的に検討した。

【結果】全体の白内障手術におけるPE症例は3.1%であり、地域・施設間差異を認めた(Chi-square test, $p=0.012$)。年齢 76.7 ± 6.2 歳、男性14眼・女性35眼、通常散瞳径は 4.04 ± 0.62 mm(5mm未満：45眼(92%))、最大散瞳径は 5.92 ± 0.83 mm(5mm未満：7眼(14%))、虹彩、水晶体上のPEは27眼(6%)、46眼(94%)、水晶体動揺は3眼(6%)、眼圧 14.5 ± 3.2 mmHg、緑内障合併は13眼(27%)、点眼1,2,3剤使用が2,7,4眼、隅角開大度I：4眼(8%)、II：5眼(10%)、III：12眼(24%)、IV：28眼(58%)、角膜内皮細胞密度 2497 ± 357 cells/mm²、フレア 12.0 ± 4.9 pc/msであった。

【結論】PEに対する白内障手術の手術頻度としては約3%であり、地域・施設差を認めた。通常瞳孔径と最大瞳孔径は約2mm異なり、約6%に水晶体動揺を認め、約3割に緑内障の合併を認めた。

【利益相反公表基準：該当】有

【IC：該当】無 **【倫理審査：承認】**有